

1 学びをひらく 楽しさ

書写の学びは、生活や他の学習活動にひらいていくと俄然面白くなる。身につけた書写技能が役に立ったという喜びを意欲として次の学習へと還元していく、そうしたポジティブな学びのサイクルをつくりたい。そのためには、考えながら学び、考えながら書くことを習慣化する。「考える書写」ともいえる学習のあり方が必要と考える。

他の点画や文字に活用できてはじめて技能として成立する。そのためには、字形や筆使いに内在するルールの理解が必要であり、その過程に思考が伴う。そうした思考を習慣化するために、学習の流れを工夫したい。

日常に生きる行書の力

「考える書写」の出発点は、基礎基本の習得と定着である。自動車教習所で習得した運転技能が他の自動車・他の道での運転に生かされるのと同じように、書写技能は同一構造

基礎基本の定着 (図1)

「聞き書きする」「手紙を書く」といった生徒たちの書字活動のリアルな場を思い浮かべると、これまでの楷書の技能だけではいささか不自由である。読みやすい字を速く書くことができる行書の習得は、生徒の日常書字に大きな変化をもたらすと考える。

行書学習のあり方について、詳細は別ページにゆずるが、「考える書写」による基礎基本の定着と、日常にひらく思考を大切にしたい。

伝統的な文字文化の継承 (図2)

加速する情報化により、生徒たちを取り巻く文字環境には偏りが生じてきている。現代を生きる生徒たちにバランスのとれた文字感覚を育むために、伝統的な文字文化の学習を工夫したい。伝統的な文字文化の学びを、知識としてだけでなく、日常での書写技能の運用を支える文字感覚の学びとして示してはどうか。調べ学習などを採り入れて、多様な文字を見ながら徐々に思考を巡らせた

文字はコミュニケーション・ツールである。相手や場面を踏まえて効果的に文字を書く力を身につけることができたなら、読み手とのコミュニケーションはより円滑なものになるだろう。書くことも楽しくなるに違いない。

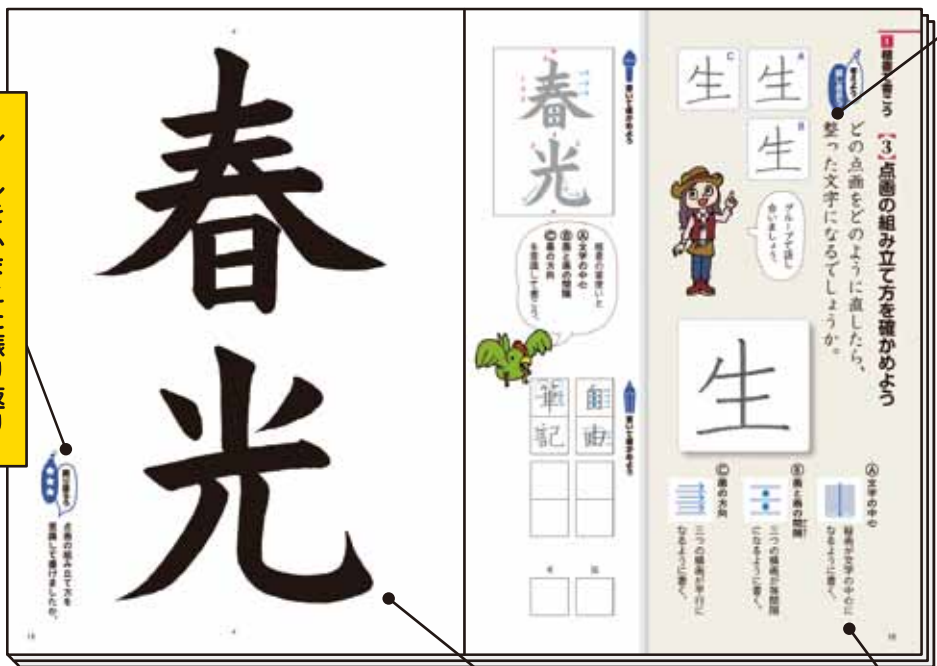
文字による円滑なコミュニケーションを支えるのは、楷書と行書を使いこなす力であり、先人の築いてきた文字文化への理解を背景とした確かな文字感覚である。「現代の書写」では、「考える書写」を基軸として、基礎基本からコミュニケーションへの応用に至るまでの学びの一貫性を大切にしている。

広島大学 松本 仁志
まつもと・ひとし
広島大学大学院教育研究科准教授。書写のキャリアキュラム開発に専心。著書に『筆順のはなし』『書くこと』の学びを支える国語科書写の展開がある。



〈図1〉基礎基本の定着

ルールへの気づきにいざなう問いかけ



書いて確かめる・身につける

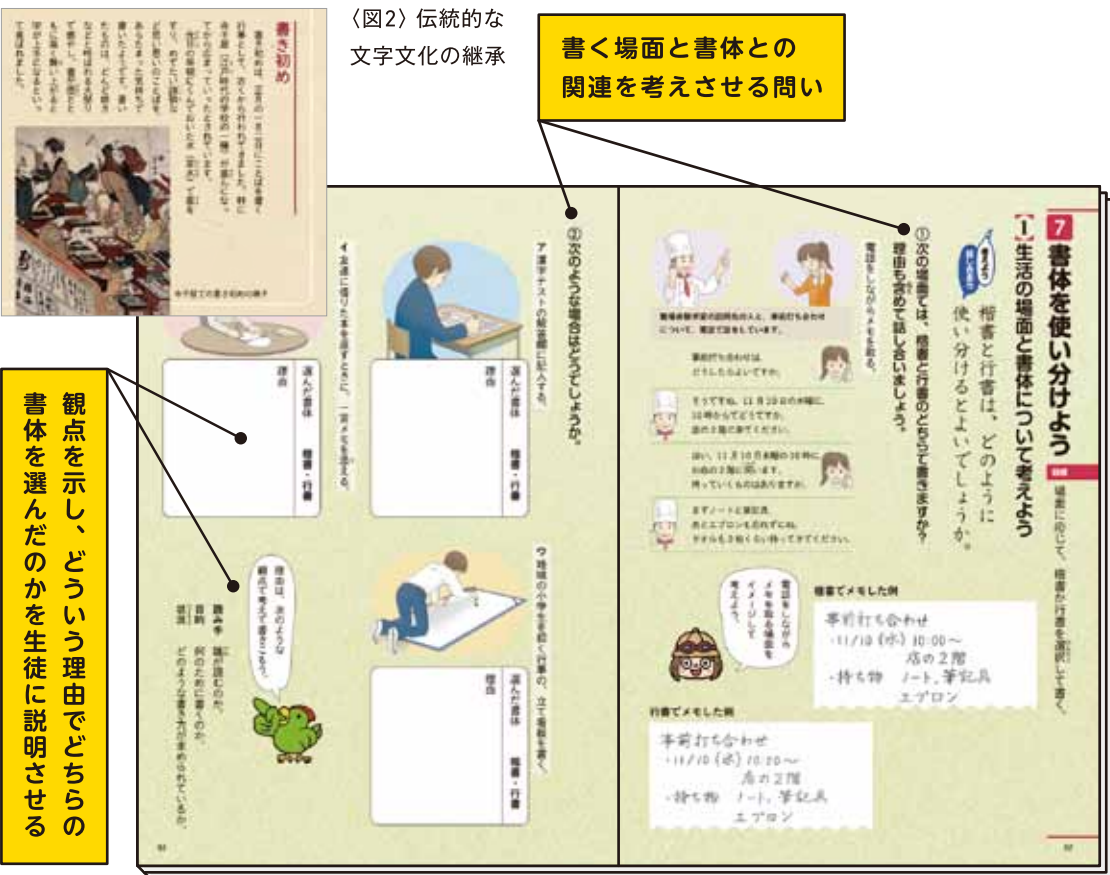
考える

ルールをふまえた振り返り

〈図2〉伝統的な文字文化の継承

書く場面と書体との関連を考えさせる問い

〈図3〉コミュニケーションとしての書写の力



観点を示し、どういう理由でどさらの書体を選んだのかを生徒に説明させる